

平成 25 年度第 2 回青森市子ども・子育て会議（会議概要）

- 1 開催日時 平成 25 年 11 月 9 日（土）10:00～12:00
- 2 開催場所 青森市福祉増進センター（しあわせプラザ）3 階 大会議室
- 3 出席委員 内海隆 会長、赤平怜子 委員、天内博久 委員、五十嵐容子 委員、
一戸倫子 委員、伊藤えり子 委員、今村良司 委員、葛西義明 委員、
工藤研一 委員、久保田正美 委員、佐久田今日子 委員、佐藤えり 委員、
柴田園子 委員、清野千世子 委員、橋本歩 委員、山田孝憲 委員
- 4 欠席委員 大村育子 委員、工藤協志 委員、鈴木互 委員、宮崎秀一 委員
- 5 事務局出席者 健康福祉部長 赤垣敏子、次長 貝森敦子、
子どもしあわせ課長 館山新、副参事 小倉信三、主幹 土岐志保、
主幹 太田直樹、主幹 竹内巧、主査 駒ヶ嶺祐、主事 小野寛史、
子ども支援センター所長 高坂道子

6 会議の要旨

(1) 開会

(2) 健康福祉部長あいさつ

(3) 議事

・子ども・子育て支援ニーズ調査及び教育・保育提供区域の設定について

事務局から資料 1、資料 2 及び資料 6 について説明。

委員

調査票は、回収率を上げるという点で、保護者が回答しやすいよう全体を通して優しい言葉で、また、ルビを振るなど工夫して欲しい。

委員

字体は明朝体ではなく、ゴシック体等の方が見やすいのではないか。また、挿絵は余白がある表紙に入れて欲しい。

委員

アンケートを実施した際、カラー化や、挿絵やイラストを入れたところ回収率が上が

った。また、設問を記述式よりも選択式にすることで回収率が上がる傾向にある。携帯のメールでのアンケートも回収率が高い。文字を書かないで済むのであれば意見は言いたい、というのが子育て中の保護者の本音だと思われる。

委員

回答率を上げるには、「何のためにこのアンケートを取っているのか」ということを分かりやすくする必要があるのではないか。

会長

文字については考えてもよいのではないか。表紙に挿絵やイラストを入れることについては、役所によるアンケートだということで、ある程度の一線は守りたい。また、アンケートは時間的に30分近くかかり、お子さんが横にいて回答できるかどうかということもあるが、青森市子ども総合計画の経年変化や進捗状況を探るには、設問項目を減らすことは勇気がいると感じる。

事務局

回収率を上げるための御意見を参考に、字体や挿絵について工夫させていただく。

委員

アンケートを発送する前に関係機関にリーフレットなどを配付し、調査への協力を呼びかければ回収率は上がるのではないか。

会長

事前にアナウンスすることは可能か。

事務局

可能である。

委員

携帯等からアクセスできるようにすれば、保護者は任意の時間で回答することができる。調査票は必ずしも紙である必要はないのではないか。

事務局

確かに回収率は上がるだろうが、システムの改修をしないと対応できない。

会長

本当は、手軽にその場で答えられる調査が一番いい。

委員の皆様には、事前に何らかの機会にこのような調査があることを周知して欲しい。

委員

調査票の返信用封筒はポストに入るのか。

事務局

入る。

委員

青森市でトワイライトステイやショートステイを実施していないにもかかわらず、調査票に記載しているのはなぜか。

事務局

保護者のニーズを見極めるためである。

委員

資料3(修正版)にある「教育・保育事業の実施場所一覧」は、地区ごとに教育・保育事業の実施場所が記載されておらず、非常に見づらい。

事務局

例えば、現在利用している幼稚園の名前から地区を見ることになるので、このように記載している。

事務局

設問がどういう施設を利用しているのかという切り口から入って、次に、その施設の場所を聞いているので、保護者が調査票の設問の内容に沿って回答しやすいよう、設問と合う形にしている。

委員

回答の有効性はどのように判断するのか。また、健康診断の際に調査を実施する方が、回収率や回答の有効性が高いのではないか。

事務局

こちらとしてはいただいた回答の内容でしか判断できないため、正しいものとして捉えるしかない。また、調査対象者は無作為で抽出することを前提としている。

会長

今回の調査は国のひな形を基に全国で行われるため、あまり独自のカラーで実施しない方がいいのではないかと。

委員

資料 3 (修正版) の問 19 の選択肢に「部活動」とあるが、市内には 3 年生以下を対象に部活動を実施している小学校はあるのか。

事務局

3 年生から実施している小学校がある。

会長

資料 1 に該当する部分あるいは資料 2 の教育・保育提供区域について、御質問、御意見はあるか。

委員

区域に関して、最終的には青森市全体の需要の中で調整する機能をどこかで持たせないと危険なのではないか。

違う区との連携や区ごとの特色が出てきた時に対して考慮する余地が必要ではないか。今、区切った区が、将来も絶対的なものなのか。

事務局

5 年に 1 回、見直していくということがこの計画の前提にある。区割りにおいても 5 年後にはその時の状況を見て見直す。

職場に近いところでのニーズを踏まえて設定すべきとの御指摘については、自分のお住まいでないところも希望している方がいるという実態を踏まえての、それを飲み込めるエリアということで、この設定を考えた。

委員

よく分かった。いろいろな諸事情も飲み込んで運用できる区であるということ、共通理解としてはっきりさせておかないと、後で違う解釈が発生してしまう可能性があることを懸念している。

事務局

市の区域設定の考え方は、当該地区にある保育所、幼稚園の希望率として、東部地区の保育所でいえば、保護者の方の 30% がこのエリアでないところを望んでいるという実態を捉えて、制度設計をしていくことになる。

会長

全体を通して、御意見、御質問をいただきたい。

委員

資料 3 の表紙に「青森市の子どもたちのためにご協力ください」など、モチベーションが上がるキャッチコピーを検討いただきたい。

事務局

表紙の余白を上手に使ってみたい。

委員

文章のフォントについて、国の調査票のひな形を真似たらどうか。

事務局

工夫してみる。

委員

アンケートを書く方が途中でやめてしまわないよう、欄外に「半分来ましたよ」とか「あともう少しですよ」などのナビゲーションを記載してはどうか。

会長

ナビゲーションは必要かもしれない。検討して欲しい。

委員

調査票を発送してから回収するまでの期間はどれくらいか。

事務局

大体 2、3 週間と見込んでいる。

会長

今回、委員から出された意見をできる限り反映した調査票にしていきたい。

(4) 閉会